

第25回「海の香りのする詩」

海をテーマにした「海の香りのする詩」の受賞作品が決定しました。小学校から238点、中学校からは369点の応募があり、次のみなさんが入賞しました。

小学生の部

大賞

「初サザエ、ばあちゃんと」 西村 心奏（菅島小学校6年）

初体験のサザエ取り
ちっちゃいばあと、浅瀬にて
ホラ貝鳴るまで待機中

ぶおー

「よしっやったるぞー」

気合いを入れて、いざ出発
チャプチャプ ジャブジャブ
サザエくん、どこにおる

陰に隠れてウニ達が、皆仲良くかくれんぼ
大小色んな魚達、そんなに急いでどこ行くん
「こー、サザエ、こっちやでー」

「あそこん、あるでなー」
教えられても分からへん
やっぱ探すのも難しい

深くもぐれば分かるかな
息をとめたら、ドッポーン
どこにいるんだサザエくん
海藻かき分け、見つけんでー
やっと見つけたサザエくん
岩に挟まれ海ん底

初サザエ、ゲットだぜ

「こー、アワビ、おったでー」

アワビのからの表面は、

ゴツゴツしていて岩のよう

私もこんなとれたらなー

楽しみつくしたその後は、

ホラ貝鳴ったで上がりましょ

ジャブジャブ チャプチャプ

海から岸に上がったら

見えないおもりのしかかる

「もつといっしょに遊ぼうよ」

時間が来たで、また今度

私と海はバイバイだ

船が来た

また行きたいな、楽しみだ

大物大量ゲットする、

未来の私は海女さんだ

選評

応募作品に触れると、鳥羽の子どもたちが、鳥羽の海とともに暮らしていることがひしひしと伝わってきます。どの作品も、海を通して聞こえた音、感じた風、目にした光景など、その一瞬に五感で感じた思いを、言葉を選びながら豊かに表現しています。そこには、海の恵みへの感謝の思いも込められています。

子どもたちは、研ぎ澄まされた言葉で海を通して見た家族や自分を映し出し、作品に触れた人の心を震わせてくれています。そして、読み手の想像力をかき立て、言葉や会話の重なりを楽しんでいるようにも感じました。

小学生の部（大賞）

ホラ貝の号砲で始まるサザエ取り、それをおばあちゃんと待つわくわく感、鳴った後に切り替わった情景が、波をかき分ける音や会話から、映像を見ているかのように伝わってきます。読み進めると、心奏さんのサザエ取りを応援したくなる気持ちがこみ上げ、作品に引き込まれていきました。終了を知らせるホラ貝の音とともに、海の疲れと大好きな海で見たおばあちゃんへの尊敬の念があふれてきます。そして、海とおばあちゃんを通して、自分を見つめ、少し先の自分の姿を思い描いた心奏さんの将来に期待が高まりました。

中学生の部（大賞）

日常の中にある海と帆夏さんの交わす心の対話が、リズムに乗りながらも、しっとりと広がっていきます。

最初に、つらかったこと、それでも踏ん張ったという自分を認める心情を海に語り始めます。さらに、悔しさをにじませながらも次の目標を見つけ、そして素直な心で喜びを大声で叫び、自分もできるという達成感へとつなげています。海との対話を繰り返しながら、心の浮き沈みを冷静にとらえ、自分と向き合い、新しいチャレンジを始めようとする帆夏さんの成長が伝わってきます。

今日も明日も明後日もという言葉の重なりは、過去のつらさや悔しさ、喜びもバネにして、明るい未来を生きていくという帆夏さんの力強い誓いのように感じました。

【全体を通して】

すべての応募作品で、海を通して家族と今の自分を見つめ、少し先の未来の成長した自分へのメッセージが描かれていました。子どもたちが、その未来に向かって、出会いや体験を通して心を耕し、鳥羽の海のような豊かな表情と心を持った人に育っていくことを願っています。

（選考委員長 齋藤 隆彦）

教育委員会生涯学習課 ☎ 25 1268

「海は静かに聞いてくれる」

濱崎 帆夏 (答志中学校2年)

ザザアーザザアーという海に

心の中で話すんだ

涙が出そうになったこと

それでも泣かずに居れたこと

ザザアーザザアーという海に

小さな声で話すんだ

負けて悔しかったこと

次は勝つぞと決めたこと

ザザアーザザアーという海に

大きな声で叫ぶんだ

跳ぶほどうれしかったこと

やれば出来ると知ったこと

涙を堪えて頑張った

そんなに焦ることはない

努力をすれば出来るんだ

ザザアーザザアーという海は

いつも私にそう言った

今日も明日も明後日も

大きな声で叫びたい

今日も明日も明後日も

私は笑顔で叫びたい

その他の受賞作品は次のとおりです。

小学生の部

伊良子清白賞 「ばあちゃんとガゼ(パ

フンウニ) 木下雄陽(安楽島小5年)

入賞 「わたしのおばあちゃんは海女」

下村珠愛(弘道小5年)、「友だちとの

思い出の海 千鳥ヶ浜」小林亮太(弘

道小6年)、「かっこいいいぼくのじい

ちゃん」青山颯斗(弘道小6年)

奨励賞 「くろでの歳無」中村歩睦(安

楽島小6年)、「おいしいワカメをつく

るために」中村華蓮(答志小6年)、「海

の上の男」里中鯛旬(安楽島小5年)、「

つり」住井諒山(鳥羽小6年)、「私

だけの海の音」川原瑠心(答志小5年)

中学生の部

伊良子清白賞 「初めて」今井悠翔(鳥

羽東中3年)

入賞 「空の色 海の翼」西井もか(鳥

羽東中2年)、「自慢のじいちゃん」河

村奈寧美(加茂中2年)、「おばあちゃ

んとのおい出伊藤亜姫(鳥羽東中3年)

奨励賞 「波打ち際」野村吏市(長岡

中3年)、「海女」中村萌花(答志中3

年)、「海からの誘い」澤田美羽香(鳥

羽東中2年)、「夏の訪れ」福永哩都(加

茂中3年)、「冬の家」石川結捺(鳥羽

東中3年)

みなさんの作品は、受賞作品集とし

て編集し配布する予定です。

※敬称略

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記

vol.22

~イワヒゲについて~

水産研究所 ☎ 25 3316



干上がった岩の上に生えるイワヒゲ。松の葉のようにも見える。



枯れて短くなったイワヒゲと先のほうにポコポコとしたラン藻。

イワヒゲ。一般には知られていない海藻だろう。紹介する理由は、本種は太平洋岸中部域で磯歩き時にみられる海藻群落の代表種の一つであるということと、「これ何ですか?このヒゲみたいなのものは」と聞かれることが多く、その都度「確かにヒゲみたいだし、目立つよな。名前はイワヒゲ」と答えるそのやり取りが面白く、ここで覚えてもらいたい、海で遊ぶときに友人などに知識を披露してもらえたらと考えたからだ。

イワヒゲはワカメと同じ褐

色の色素を持つ褐藻であるが、ワカメなどよりも「毛のり(カヤモノリ)」と同じカヤモノリ科に属している。他に近い仲間にはニシイワヒゲ、ウツロイワヒゲがいるが三重県にはイワヒゲしか生えていない。フクロフノリやイロロ(石鏡の人にはなじみのあるウシノシテのこと)のように潮が引くと乾くような場所に生えている。僕はこの種の海藻に非常に興味を持っている。海藻は干出している間、乾いてしまつと光合成に必要な炭酸塩(二酸化炭素の代わりに使う)を吸収することができない。そもそも、乾燥や紫外線から身を守るすべを持っていない多くの海藻は海中から出してしまつたとたちまち死んでしまつ。しかし、これらの海藻は干潮の間くらいなら、乾いたり紫外線を浴びたりしても平気なのである。なぜなのか。どういふシステムを発達させたのか。本来持っていた能力なのかも同じシステムでも同じシステムをどうやって持つようになったのか。どうだろう。磯から生えたヒゲに興味がないだろうか。